序　章　王朝物語とは何か――王朝物語及び〈皇女〉の定義、〈皇女〉を研究する意図……3

第一章　平安王朝文学における〈皇女〉

第一節　『源氏物語』以前――『うつほ物語』の女一宮を中心として……9

はじめに　一　后腹皇女の婚姻――大宮と正頼の婚姻　二　父帝鍾愛の皇女の婚姻――朱雀院女一宮と仲忠の婚姻　三　降嫁後の女一宮――あて宮・女二宮・いぬ宮との関係から　おわりに

第二節　『源氏物語』――今上帝女一宮を中心として……39

はじめに　一　正編での女一宮　二　続編における女一宮①――薫と女一宮　三　続編における女一宮②――女一宮と匂宮　おわりに

第三節　『源氏物語』以後――後期物語における女一宮……58

一　『夜の寝覚』における女一宮　二　『狭衣物語』における女一宮　三　『源氏物語』と平安後期物語の女一宮　おわりに

第二章　中世王朝物語における〈皇女〉――『いはでしのぶ』を中心にして

第一節　『いはでしのぶ』における一品宮……67

はじめに　一　〈皇女〉としての一品宮――桜と宮中思慕　二　「一品宮」の持つ意味――物語史から　三　『いはでしのぶ』の一品宮――雲居の月と降嫁　四　皇女降嫁の持つ意味　おわりに

第二節　『いはでしのぶ』における女院……93

はじめに　一　「女院」の論理――母后優待と不婚内親王　二　一品宮の女院宣下　三　物語史の中の女院　四　一品宮から女院へ――「女院」が示す問題　おわりに――「母」としての一品宮

第三節　『いはでしのぶ』における前斎院……110

はじめに　一　斎院概略　二　密通と死――伏見姉妹との対比から　三　「ゆかり」としての存在　四　「前斎院」の持つ意味　おわりに

補論　「いはでしのぶ」恋と〈皇女〉……128

はじめに　一　「いはでしのぶ」という言説――「いはでおもふ」との差異から　二　「しのぶ」ことの多義性――「いはでしのぶ」という語り　三　結末としての悲恋遁世譚　おわりに

第三章　〈天皇家〉における女性の役割――〈斎王〉と〈后〉

第一節　物語史における斎宮と斎院の変貌……149

はじめに　一　物語における斎宮・斎院　二　史実の斎宮・斎院について　三　『伊勢物語』と『狭衣物語』　四　斎宮・斎院の変貌　おわりに

第二節　斎宮・斎院・一品宮、そして女院へ……173

はじめに　一　史上の「一品宮」　二　物語史上の「一品宮」　三　斎王／一品宮――『狭衣物語』と『恋路ゆかしき大将』から　四　物語史上の女院　おわりに

第三節　「中宮」という存在(一)――『夜の寝覚』を起点として……192

はじめに　一　『夜の寝覚』における后の論理　二　女性たちの対立構造　三　寝覚の上恋慕の男性たち　おわりに

第四節　「中宮」という存在(二)――『夜の寝覚』の中宮試論……209

はじめに　一　中宮と男君の様相　二　描写されない容姿　三　「中宮」としての地位　おわりに

第四章　王朝物語享受の一端――『源氏物語』「梅枝」巻から
第一節　物語享受の影響――『源氏物語』梅枝巻の文化構造……226
はじめに――問題提起　一　「薫物」と歴史概念　二　「書」と文化認識
三　『源氏物語』の文化戦略　おわりに
第二節　「梅枝」巻の物語引用――物語引用の諸相……244
一　「梅枝」巻の記憶と「春」の訪れ　二　季節の変化と「物語」のゆく
え　三　文の消却と煙　四　〈記憶の共有〉と「物語」　五　光源氏の
「記憶」
終　章　〈皇女〉のあり方と「天皇家」……259
初出一覧　267
あとがき　270
索引　左開き(1)